

「長く続いた戦争と人々の暮らし」

6年 社会科

I 実践の目指しているもの

○教材化にあたって

子どもは戦争について、「悲しくて辛いもの」「絶対にしてはいけないもの」など、漠然とした印象をもっている。本単元では、そのような戦争に対するイメージが、根拠を伴った戦争に対する認識へと変容することをねらう。

そのためには、事実を知るだけでなく、当時の人々の思いに迫っていくことも必要である。当時の人々の生活と現在の自分の生活を比較することで、戦争が人々の生活に与える影響を実感しながら理解することができる。

本時では、自分と同じ年代の子どもの学校生活について調べる。疎開先となっている学校では、勉強は午前中だけで、午後からは農作業を行っている。その様子から子どもを働かせてまで食糧を確保しなくてはならなかった厳しい状況を読み取ることができる。また、これまでの時代と比べることで、「人々の苦しい生活が続くと反乱や争い、政治的な運動が起こっていたのに、戦時中はそれが起こらなかった」という事実気付き、その理由を考える。すると、「考え方で戦争に向けられていたこと」を理解し、戦争の悲惨さについてさらに考えを深めていくことができるのである。

○資料の活用方法

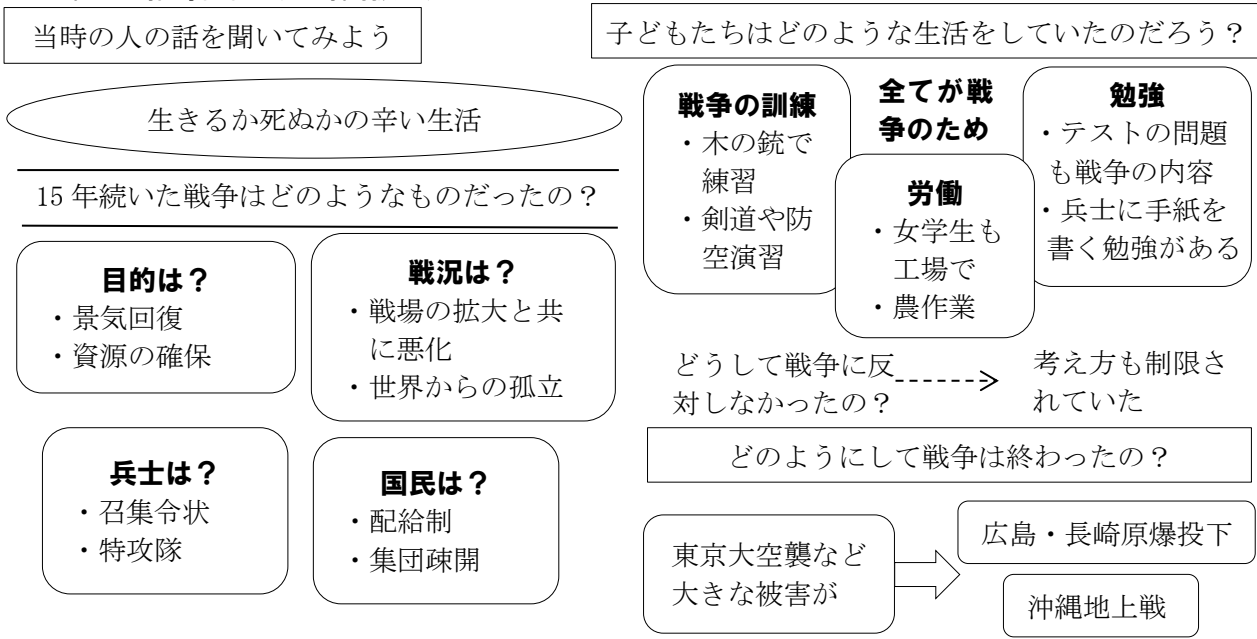
単元の始めに「札幌市平和バーチャル資料館」の映像資料を活用し、実際に戦争を体験した人の話を視聴した。子どもは、衝撃を受けるとともに「どうしてこんなことになったのだろう」という疑問をもった。また、朝活動の時間等において、「札幌市民の戦争体験」の並行読書を行った。この二つの資料により、子どもの見方や考え方を広げることができた。

II 研究の内容

1 単元の目標

- ・日中戦争、太平洋戦争、そのころの国民生活とそれらに関わる代表的な文化遺産に関心をもち、意欲的に調べることができる。（関心・意欲・態度）
- ・調べたことを比較したり、関連付けたりして、戦争によって国民生活が大きな影響を受けたことを適切に表現することができる。（思考・判断・表現）
- ・戦争を体験した人の話や文化財、地図や年表、その他の資料から、戦時中や戦後の国民生活について必要な情報を集め、読み取ったものをまとめることができる。（技能）
- ・国民が大きな被害を受けたことや戦場になった地域に大きな損害を与えたことを理解することができる。（知識・理解）

2 単元の指導計画（7時間扱い）



3 本時について

(1) 本時の目標

戦時中の子どもの様子を調べ、戦争に関わって考え方も制限されていた事実を捉え、人々の生活が戦争中心となっていた当時の日本の様子について考えることができる。

(2) 本時の展開 (4/7)

○留意点

(前時まで) 日本が戦争を始めた理由や、戦争が世界に広がっていった背景について学習している。また、当時の人々の生活について、平和バーチャル資料館や平和に関する学習資料等を用いて調べている。

○ある学校の疎開先での生活表

○ポスター

何が何でもカボチャ
を作れ

○疎開先での児童の生活表を見て、自分たちの生活と比較し、勉強が少ししかなく、学校で農作業をしていることを捉える。

学習課題：生活が苦しくなってきた中で、学校ではどんなことをしていたのだろう。

戦争の訓練

- ・木の銃を持って訓練しているよ。
- ・剣道や防空演習をしているよ。

**全てが
戦争の
ため！**

勉強

- ・テストの問題は戦争に関することばかりだよ。
- ・夏休みの宿題は、兵隊さんに手紙を書いているよ。

○平和バーチャル資料館の資料を活用し、現在にはない教科があったことや、算数や国語も戦争に関わる内容になっていることを確認する。

遊びも戦争につながるものだ。

労働

- ・女学生も工場で働いているよ。
- ・農作業をしているよ。

我慢がたくさんあったんだね。

○標語

「欲しがりません勝つまでは」
「足らぬ足らぬは工夫が足らぬ」
「ぜいたくは出来ない筈だ」

厳しい生活！

○お腹いっぱい食べることができない中、過酷な訓練や労働をしていたことを理解し、それでも戦争に協力していた理由について考える。

こんなに厳しい生活だったのに、どうして協力し続けたのだろう？

「お国のために」という教育を受けてきた。

従わないと「非国民」と厳しく取り締まられた。

戦争のために物だけでなく、人々の気持ちまで制限されていたんだね。

4 実践のポイント

【成果】

- 平和バーチャル資料館の資料を基に学習を進めたことで、全ての児童が同じ情報をもっており、共通の具体的な言葉で戦争について語る事ができた。「札幌市民の戦争体験」は、朝学習などの時間を活用して読んだ。ただ読むだけでなく、読みながら自分の感じたことを書き込むことにより、戦争について自分の意見を増やしていく事ができた。
- 教室に図書館の戦争に関する本や「札幌市民の戦争体験」を置き、いつでも手に取れるようにした。家庭学習に活用する児童が出てくるなど、子どもの学習への意欲が高まっていた。
- 苦しい生活の中、当時の人々が戦争に協力し続けた理由について、既習や資料と結び付けて考える事ができた。「家族のため」「当たり前になっていた」など自分の言葉で考える事ができた。

【課題】

- 教師の切り返しを吟味し、思考を活性化させる必要がある。例えば、「政府は正しい戦争だったと言っているが間違っていると思う。」という発言に対し、「そもそも何をもって正しいと判断するのか。」などと切り返すことで、戦時について深く考えることができる。
- 授業の最後に、分かったことをまとめとして必ず書くなど、表現する場を設定することで戦争や平和について理解を深めることができる。
- 本時だけでなく、単元を通して常に自分の生活と比較することで、「かわいそう」という感想だけでなく、戦争に対する思いをより具体的に表現することができると思う。

【課題探究的な学習に関わって】

歴史学習を進めていく中で、時代には流れがあることを意識して学習を構成してきた。また、既習の知識と新しい知識を結び付けて考えられるよう、出来事を比較しながら学習を進めてきた。

すると子どもは、「人々の不満が高まると反乱や政治運動が起こり、新しい時代へと変わっていく。」という認識をもつことができた。しかし、戦時中は目立った反乱や政治運動は起こっていない。そのズレに子どもの探究心が生まれると考えた。

本時では、「嫌がっているわけでもなく、自己犠牲でもなく、戦争が当たり前になっていたのではないかな。」「兵隊が憧れの的になっていたのでは。」「天皇のすることは絶対だと信じ切っていたと思う。」「戦争で家族が頑張っているから自分も我慢しないといけないと考えている。」「政府の正しい戦争だという言葉や、日本は強くて負けない国という言葉信じ続けていたのではないかな。」など、多様な考えが出た。意味理解を伴った知識の習得の積み重ねが、子どもの多面的・多角的な思考を生む土台となった。

ペア交流、グループ交流、全員発表など子どもや学習に合った手だてを用い、クラス全体で学び合うことでさらにその力が伸びた。